



Inclusion Setagaya 世田谷区手をつなぐ親の会 会報

No.111 発行 2017年3月

地域で生きる

会長 上原 明子

「地域で生きる」は今年2月末にリニューアルをしたHPのトップページに流れるフレーズです。

今年度当会は創立60周年を迎えた節目の年でした。今年度の活動については本誌に報告を載せておりますので、ご一読ください。

先日渋谷区の知人から、渋谷区内の入所支援施設「はあとびあ原宿」の広報紙を頂きました。広報紙はさまざまな行事や活動の時の利用者さんの笑顔いっぱいの写真で埋め尽くされています。青鳥高等部時代のお友達を見つけた娘は「みんな元気なのね、楽しそうね」と懐かしそうです。それくらい、明るい表情です。

はあとびあ原宿は渋谷区における障害者福祉の中核を担う複合施設で平成20年6月に開設されました。世田谷の親の会でも、開設された直後に見学会を実施、原宿の商業地を歩いて行けるその立地に驚いたものです。

「はあとびあ」は国の施設整備の補助対象とならなかったため、渋谷区の独自予算で建設されたと聞いています。現在は(社福)友愛学園の受託運営で、街の中にある期限付きではない施設という点が特徴と言えます。世田谷にこのような施設を希望される方も多いでしょうが、愛の手帳所持者数も世田谷は渋谷の5倍超となれば、世田谷は1カ所の施設では到底間に合いません。

今年度の区への要望でも、梅ヶ丘拠点施設

に関し地域移行を前提とした有期限の施設であることに対し、会員の方から地域移行の可能性に多くの意見が出されました。

梅ヶ丘の拠点施設の開設が2年後と迫りましたが、世田谷区の拠点(センター)としてどのように機能していくのか具体的にはまだ見えておりません。第4期世田谷区障害福祉計画にも、その期間中に1カ所設置(面的整備)と記載がある「地域生活支援拠点」について、梅ヶ丘の整備と並行して検討していくことはできないのでしょうか。障害のある子どもがいる家族や在宅の方、ひとり暮らしの方、梅ヶ丘拠点施設から地域移行する方などを支えるためにも、各地区の体制整備は必要です。

去る11月23日に親の会はSetagayaアミーゴという本人活動を開始しました。当日集まった本人たちと一緒に笑って大いに楽しみましたが、同時にここに集まった彼らは地域で生活することを望むだろうと思うと、親なきあとの本人たちの生活を支える仕組みが必要なのだと痛切に感じました。

「親なきあとは親あるうちに」は後見制度を考えるときによく使われますが、地域で生きていくためにも大切な言葉です。住まいかた、本人の気持ちに寄り添うチーム作りなど、親が高齢になる前の気力体力がまだあるうちに、子ども(本人)の将来を思い描き、早めに準備しなくてはならないのだと思います。